

みんなで育てる「たいしの子」vol.6

幼小中一貫教育だより

令和5年度の町立中学校の取り組み

町立中学校では「すべての教育活動をとおして非認知能力の伸長」をめざすために、教育活動の見直しと検討を行いました。まず、学校教育目標に沿って、各学年がどのような学年にしたいのか、この1年で「生徒のどのような力が伸びてほしいのか、そのためには何を意識して取り組むのか。」について話し合い、学年でつけたい力を見る化したシートを作成し、全教職員で共有しました。その内容を生徒と共有するために、生徒玄関に掲示を行ない、学校全体で意識して取り組めるようにしています。

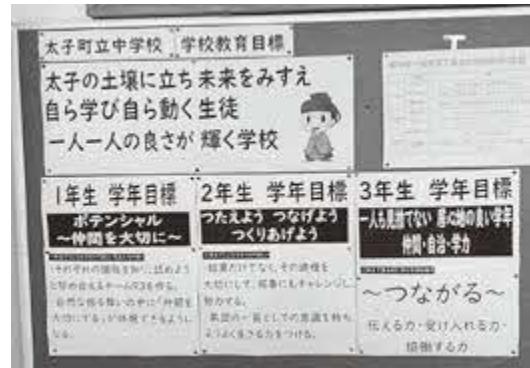
また、町立中学校の伝統を継承しつつ、それぞれの行事をとおして生徒に身につけてほしい力についても再確認しました。そして、一つ一つの取り組みに関して、どのような力を生徒に身につけて欲しいのか、そのためには何を意識して教師は取り組むべきなのかを明確にしました。

授業においては、「未来を生きる力を育む生徒主体の授業づくり」をテーマとして、非認知能力（未来を生きる力）の向上を意識した授業づくりを行い、勉強に取り組む姿勢や学びに向かう力を向上させる工夫も行っています。

OECD（経済協力開発機構）では、世界が大きく変わるであろう2030年という時代を生きていくために求められる力を「自ら考え主体的に行動し多様な人々と協働しながら持続可能な社会へと責任をもって変革していく力」とよんでいます。様々な社会的な課題を「自分事」として考えることができるとどうかが問われています。

5月8日以降、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが、「5類」に移行され、ようやく従来の町立中学校の姿へと戻りつつあります。

幼小中一貫教育で「非認知能力の育成」を軸とした取り組みを進め、「太子の土壤に立って、未来を見据え、自ら学び自ら動く生徒、一人一人の良さが輝く学校」をめざしていきます。



教えて!とくどめ先生!

「子ども自身が自分で非認知能力を意識して向上させていくために、どう大人がアプローチしていくのか？」

前号で、自分の意識で伸ばしていくことこそが、非認知能力を伸ばすためのキーワードとなるお話をしました。それを踏まえ、今回は子どもが自分自身で意識して非認知能力を向上させていくために、周りの大人がどうアプローチしていくのかという疑問に対してもお答えしていきます。

この疑問に単刀直入にお答えするならば、「押しつけ」ではなく、「意識づけ」のできる環境を創っていくことが大切になります。子どもたちが自分で意識することで伸ばせる非認知能力だから、大人は子どもを放っておけばいいということではありません。大人は、子どもが自ら意識することができるような環境を意図的に創っていきましょう。子どもたちが様々な環境に出会いことで、自分自身の中に変化が起こることはよくあります。それは、親子の会話の中でも起こります。ここで大事になるのは、「もっと●●しなさい」「今まで以上に●●に力を入れなさい」という直接的な言葉で伝えないということです。これをしてしまうと、「押しつけ」になってしまうからです。

子どもたちに大人の言ふことを聞かせるのではなく、子どもが大人とのやりとりを通して「自分は、もっと〇〇な人になりたい！」や「もっと〇〇〇にならなければ！」というように意識ができるようになるかが重要になってきます。押しつけではなく、子どもたちが大人からの思いを受け取ってくれるかどうかについて委ねていくしかないのです。この点では、押しつけの方が圧倒的に簡単ですが、子どもの非認知能力の伸長を望むのであれば、大人は、グッとこらえ粘り強く子どもと関わっていくことが大切になります。子どもにとっての環境の一部としての大人が、いかに人生において大切なことや価値観を子どもたちにうまく気づかせていくことができるかが、大人の大きな役割になってきます。

教えてとくどめ先生のコーナー 次回は、「子どもに意識付けする際の大人のポイントとは」です。
お楽しみに！

◆問合せ 教育総務課 ☎98-5533